
Blood killer

* 真央 *

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blood killer

【Nコード】

N9672Y

【作者名】

真央

【あらすじ】

銃で殺す男は笑いだす。
まるで愉快犯のように。

妖艶に微笑む。
まるで花魁のように。

そんな男女達に目をつけられた!?

絶体絶命の俺。(前書き)

初めてのちよいグロ)(笑

さめた目でなく

あたたかい目で見守って下されば

幸いです)(笑

絶体絶命の俺。

「ねえ、殺していい？」

男はイカれた微笑みで問う。

「はあ！？」

男は相手の言うことをきかず銃を構える。

「せーの・・・ばん」

「ぐはあ！！・・・おま・・・え・・・。」

真っ赤な鮮血が周りに飛び散る。

「あ。死んじゃったあー」

にたりと薄気味悪く笑みをこぼす男。
それを陰でみちゃった俺

俺　じゃねえよ！！俺、テンパっておかしくなった！！

絶対あの男やべえやつだよ！！
銃で殺して笑ってたんだぜ？

俺・・・やばくね？
殺されるんじゃない・・・！？

”ガン”

うっわ！！俺、近くにあったドラム缶けっちまった・・・。

「ねえ、君だぁーれ？」

「あはは・・・。」

苦笑いしかできねえよ！！

俺どーなんの！？

絶体絶命の俺。(後書き)

どうでしたか??

最後まで

あたたかい目をお願いしますーすー(笑)

白いパーカー男は何ですか！？（前書き）

なんかとっても

訳わからない・・・。笑

白いパーカー男は何ですか!?

「早く言わないとやっちゃんやっちゃん?」

「えーと・・・御月みつき 優貴斗ゆきとです・・・。」

「ふーん・・・みちやっただ?」

すごい笑顔で問いかけてくる・・・のがすっくすっくくわい・・・。

「い、いいいいいいえ。な、何もみておりません。」

「あつは じゃあー殺していい?」

「すみません!!嘘つきましたっつ!!!!!!」

何で俺こんなに弱いんだろ・・・???(泣)

「ふーん。ま、いいや。おーい!!フェオン!!」

「うーい。」

イカれた男が大声で呼ぶと
なんか白いパーカー男が屋根から
ジャンプしてきてニヤリと不敵に笑った。

「コレ始末？」

「そうしてー めんどいし」

めんどいし で

俺は片づけられたし・・・。

「んじゃ行きまーす。」

「何を!？」

「風よ。かまいたちよ。今呼び起こせ!」

俺の質問を無視して

パーカー男は大声をだし空に手を掲げる。

「な、何してんの？」

銃がでたり変なこと言ったり・・・。
なんだよ、かまいたちって・・・。

わけわかんねえよー！！

白いパーカー男は何ですか！？（後書き）

私も訳分かりません（（笑

ナンパですか？・・・いいえ、ただの同行です！！（前書き）

ナンパじゃないです（笑）

ナンパですか？．．．いいえ、ただの同行です！！

「あれ？きかない？」

「んなハズないっしょ？」

こいつら何者なんだ．．．？

銃刀法違反にも引つかからないなんて．．．
んー．．．？？

パーカー男は

白いパーカーに青いジーパン。

髪が茶髪で右耳に紅いピアスをつけている。
見た目は中々みたいだ。

イカれた男は

普通に長袖Ｔシャツに黒っぽいジーパン。
それに茶髪。

見た目は高っつぽい．．．？

「優貴斗くん．．．だっけ？」

「は、はい。」

何だ？何かされるのか！？

「キミ、何者？」

冷たい顔をしたイカれた男が
目の前にいた。

さっきまでは
数メートル離れていたのに．．．。

俺は息をのむ。

「俺は．．．普通の．．．人間．．．です．．．。」

掠れた声で
必死に口から絞り出す。

なんだ．．．？

この圧倒されるような
威圧感。

さっきまではなかったのに・・・。

「へえ。それにしては・・・
特殊な体質だね。」

イカれた男は
俺を感心したように見つめる。

「よし、俺と
同行してもらおうか。」

「はい？」

なんで俺は
同行させられるんでしょうか???

ナンパですか？・・・いいえ、ただの同行です！！（後書き）

遅くなりましたっ

変態ですか？変人ですか？・・・いえ、そういう意味ではございません。(前書

サブタイトル長っっ！！

そして更新遅っっ！！

変態ですか？変人ですか？．．．いえ、そういう意味ではごさいません。

「あの一．．．俺
どこに．．．?？」

なんかやみくもに
歩いてる気分なんだけど．．．。

なんだか．．．

全く着く心配がしないというか．．．。

しかも
暗い森林に向かってる気が
しなくもない。

まさか殺されんの！？

”高2男子森林の奥で自殺”

とかで新聞に載りたくないっつー！！

すっげーやだ！！

逃げたい！！．．．のに

パーカー男が後ろにいて

イカれた男が前にいるから

逃げたくとも逃げられない状況に．．．。

「あもう．．．。」

反射的に声が小さくなる。

「なあに？」

イカれた男はなんだか

テンションがさっきと変わって

陽気な雰囲気になっていた。

「俺、もしかして．．．。」

殺されるんですか？
と、言う前に声を重ねられた。

「殺されると思った？」

「あ．．．はい。」

それはもう完璧に！！

「まあ、キミが普通の人間なら
殺してたね」

そんなにこやかに
あっさりと俺の死を告げないでください（泣

ってちょっと待てよ．．．???

”普通の人間なら”

ってことは俺は普通ではないと
いうことで．．．。

「普通ではないとは
変態とか変人って意味ですか!?!」

「違うけど？」

「す、すみませんっ。」

逆にその微笑みと語尾の
音符が恐怖です・・・(泣

ってかじゃあ

俺は一体何者ですか!?!??

変態ですか？変人ですか？・・・いえ、そういう意味ではございません。（後書

何者なんですかね・・・???

私もよく

理解してません（笑）

城ですか！？いいえ、居場所です。

「ま、その説明はのちほどね」

「はあ．．．。」

適当なことですね．．．）（汗

「あ、俺らは政府関係者なんだよねえ」

「あ、そうなんですか．．．．え！？ええええええ！？」

「うっせーな！！お前！！」

「あ、すいません。」

パーカー男に怒鳴られた・・・。

何で俺、俺より年下っぽいのに
怒られてんのだろ・・・。

俺一応、高2なんだけど・・・
パーカー男は中3くらいしかみえない。

「あ、あの、つかぬことをお聞きしますが
名前と年齢だけお尋ねしてよろしいですかね？」

ビ、ビビるな！俺！！

「俺はねえー・・・
No.1 アルムだよ ついでに歳は18の高3でえす」

振り向いて

殺気のない笑みを俺に向けるイカれた男。

「あの、なんて呼べば??？」

「アルムでいいよ・・・敵じゃないしね。」

「はぁ・・・。」

敵じゃないってどういう意味だろ・・・？

「俺はNo.4フェオンだっ！！

歳は15の中3だっ！！」

「ああやっぱり。」

「どーいう意味だコラー！！」

パーカー男は大声でキレる。

いや、うん、身長が・・・ね？

まあ、言わないでおこう。

「で、なんて呼んだらいいですか？」

さっきより少しダルめに言う。

だって所詮は年下でそんなに危なくない。

俺のカンだけど。

「別にフェオンでいい！お前は？」

あーそか。

歳は言っただけだったっけ？

「御月優貴斗。17の高2。」

「優貴斗くんは、いずれ僕らみたいな
ナンバーがつくよ」

ナンバー???

「それ、さつきも思ったんですけど
ナンバー1とか4やら・・・それってなんですか??」

「ああ俺めんどくさいから
政府のトップにでも聞いて」

ええー・・・

ぶん投げっすか・・・。

「はい、着いた」

アルムはそう言って足をとめた・・・のは
いいんだけどね・・・

ここはどこ!?!?

「政府の犬の居場所とでも
言っておこうかな」

言っておこうかな・・・
なんてそんなノリではついていけません()(汗

さて、このバカでっかい城は
なんですか!?!?

犯罪者ですか！！・・・違つんです。(前書き)

犯罪者ではないです(笑)

犯罪者ですか!!・・・違つんです。

「ここは・・・?」

「んー俺らが任務遂行までの間
隠れ蓑としてるところかな」

任務って

人殺し・・・!?

え、俺そんなやつらに
名前教えちゃったの!?

「さて中に入るうか」

「え・・・?」

「いまさら逃げるわけじゃないよね?」

「はい……」(泣)

もうやだ……」(泣)

中に連れて行かれると
古い洋館のような内装である。

案外綺麗……。

もっと汚いかと……。

そんなことを考えてる俺を無視して
ずかずかと歩いて行く2人。

「君、誰……?」

「何言つて……。」

俺は御月優貴斗ってさっきも

「いったでしょ？」

何回言ったら覚えてくれるのぞ。

「ん？なんでもう一回名前言ってるの？」

「はい？フェオンが聞いてきたんじゃ・・・??？」

「俺もアルムもさつきから一言も話してないし。」

「じゃあ名前聞いてきたのは・・・。」

俺は言いながら後ろを振り向いた・・・ら
黒ずくめの男がいた。

「なんかいたあああああ！！！！！！！！！」

大声で叫ぶ。

「お前うるさいっつー!!」

「だ、だってなんかいる!!」

「んー？」

アルムは不思議そうに俺の後ろをみる。

「あ、こんなところにいたの」

「え？」

「あ、ほんとだ。こんなところにいたのかー」

「え？」

なになに・・・。

知り合いですか・・・???

この明らかに犯罪者っぽい身なりをした
黒ずくめは誰ですか!?

犯罪者ですか!! . . . 違ってます。(後書き)

さて次で名前がわかります . . .

犯罪者身なりの人のね!! (笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9672y/>

Blood killer

2011年12月11日16時52分発行